聖書における *And* と *Behold*

—A. V. と N. E. B. を中心として—

土　居　琢　磨

1604年 James I に任命されて翻訳に当った47名の聖書改訳委員は，学殖豊かな宗教家及び学者であり，六種の委員会に分れて翻訳個所を分担した。例えば，新約聖書について言えば，*Romans* から *Jude* までが一つの委員会，残り全部は別の委員会が分担している。各委員が英訳した原稿を小委員会に持ち寄って，論議，補足，修正が行われ，更に，各小委員会の委員長から成る中央委員会で，全体からみた校閲を受けて，1611年上梓されたのが Authorized Version である。

「新約」は Tyndale の英訳（1525年）や Great Bible（1539年）に負う処が大きい。Tyndale の簡明，直截な表現は A. V. にうけつがれ，(1) 音節の少い，英語本来の語彙が多く用いられている。*Mark* xiv. 72 の And when he (=Peter) thought thereon, he wept, は OE 古来の語で綴られ，形容詞を省いた hard-boiled style の簡朴な表現の中から，Peter の悔恨が聞えてくる。

A. V. は Shakespeare と共に現代英語の基礎を固めたが，前者には実際，Henry VIII 時代の英語が用いられているので，後者よりも古い言葉が多い。原文に不完全

(1) *cf.* S. Potter : *Our Language* pp. 53—54 "His (= Tyndale's) gifts as a writer of simple musical narrative were fully revealed in his translation of the New Testament in 1525. Like all masters of language, he wrote for the ear and not for the eye. When he read aloud his translations to the merchants of Antwerp, the words, we are told by one listener, 'proceeded so fruitfully, sweetly, and gently from him, much like to the writing of John the Evangelist, that it was a heavenly comfort and joy to the audience to hear him read the scriptures'. With Tyndale modern English prose began. One third of the King James Bible of 1611, it has been computed, is worded exactly as Tyndale left it... But the revisers (=King James's scholars) were intelligently conservative : they knew their task, and their respect for the majestic simplicity of Tyndale's language was profound."

な点もあることが，その後の研究によって判るにつけ，改訳の必要が生じて，英米の学者による Revised Version の新約が1881年，旧約は1885年に完成した。米国側独自の見解を反映した American Standard Version が1901年に現われたが，骨子においては R. V. と大差はない。それと前後して，種々の個人訳も試みられたが，原典の研究と相俟って，米国で，1937年に改訳委員会が設立され，1946年に新約，1952年に旧約が，古語を一層避けた平明な現代語訳として， Revised Standard Version の名のもとに世に送られた。

A. V.—R. V.—A. S. V.—R. S. V. は一連をなすもので，その根底には A. V. の familiar な語句は，出来るだけ留めて置こうという傾向があった。

しかし，1946年10月，国教会，全プロテスタント教会，聖書協会の代表が会して，最近発達した聖書学に基き，正しいギリシヤ語原典から今日の英語に適する様に，新しく翻訳をする旨の決議がなされ，Dr. C. H. Dodd を委員長として，30名の聖書学者が三部門（即ち，新約，旧約，アポクリファ）に分れて英訳の任に当った。翻訳原稿は，A. V. の場合と同じく，持ち寄って各部門で討議され 更に，別に設けられた文学顧問（6名から成るが，その名前は公開されていない）で verse 毎に context に相応しい表現かどうか慎重に推敲され，伝統に囚われず，同時に奇を衒うこともなく，凡ての人に親しまれる平易明快な訳文によって，その価値を "timeless"(ロ) なものにしようとした。その成果が *The New English Bible* となって，新約が1961年3月， Oxford, Cambridge 両大学出版部から世に出た。続いて旧約等も上梓されることになっている。

これは A. V. から R. S. V. に至る聖書の改訳ではない。 Introduction にも記されている様に，"the current speech of our own time" を用いて "the best available Greek text" の忠実な英訳である。 archaism, jargon を極力避けて，平常の語彙，構文やリズムが用いられている。仮令，完璧な語句とは必ずしも言えない個所が若干あっても，序文でことわってある様に， translation としては止む得ないものであろう。(ハ) これは，N. E. B. にとって著しい瑕瑾とはならない。

(ロ) *cf.* F. C. Grant : *Translating the Bible* p. 115

(ハ) 清水護「New English Bible の英語」（『英語青年』Vol. CVII—No.9）では，好意的批評が少し載っており， *The Sunday Telegraph* Dec. 16, 1962 には N. E. B. の語句に対する T. S. Eliot の論及がある。

A. V. の "Our Father which art in heaven" で始まる Lord's Prayer (*Matt.* vi. 9—13) が, N. E. B. では "　" で囲まれて大体そのまま引用されている。特に, N. E. B では極度に Subjunctive Mood の使用が限定されているにも拘らず,(二) ここでは, (Thy name) *be* (hallowed); (Thy kingdom) *come*, (Thy will) *be* (done) なる Subjunctive が,「宗教的な連想を伴なう 'hallowed'」(ホ) と共に, そのまま引用されていたり, "Son of David" (*Mark* xii. 35) は A. V. を踏襲している。(2節後の37では "　" を外して David's son となっている。) この種の例外が他にも少しはあるにしても, 序文で明記してある通り "a genuinely new translation" と言って差し支えない。

山上の垂訓の opening word である A. V. の Blessed are *the poor in spirit* (*Matt.* v. 3) が N. E. B. では, How blest are *those who know that they are poor.* といわば paraphrase された個所もある。

"But if paraphrase means taking the libery of introducing into a passage something which is not there, to elucidate the meaning which is there, it can be said that we have taken this liberty only with extreme caution, and in a very few passages, where without it we could see no way to attain our aim of making the meaning as clear as it could be made." と序文にある様に, この種の paraphrase は, N. E. B. の要諦とも言うべき 'accuracy' と 'clarity' を達成するための権道として充分その理由が認められよう。

A. V. と N. E. B. の間には350年の月日がある。そこで用いられた言葉にも, 絶えず変化していく英語の特性をうかがい知ることが出来る。本稿では, A. V. の *and* と *behold* を, N. E. B. までの聖書を通して観ることにする。

I　*And*

旧約聖書の原文で, verse の始めに *Vaw* が用いられた narrative style が頻繁に見られるが, 古い英訳聖書にも *and* が多く用いられている。これは, 複雑な表現

(二) 筆者による「A. V. と N. E. B. における Subjunctive Mood」(「北九州大学開学二十周年記念論文集」1966) の中に, Adverb Clause の Subjunctive と Indicative についての論及がある。

(ホ) E. Weekley: *The English Language* p. 15 (成美堂)

が未だ発達しない段階では，Paratactic な構文が用いられた言語の一面を物語る現象であり，その特性を有する原文を忠実に訳出しようとした結果に外ならない。ギリシヤ語原典を訳した新約聖書についても同じことが言える。(イ) しかも，*Vaw* の用法が多岐にわたることは，A. V. の旧約で各章の冒頭が大部分，*And*, *Now*, *Then*, *Thus* 等で始まっている点からも首肯出来よう。Greek *καὶ*, *δὲ* にも *Vaw* と同じ機能がある。

現代英語の *and* にも色々の機能があって，*but* と同じく adversative な用法がある。例えば，A. V. の *Matt.* xxi. 30, And he answered and said, I go, sir: *and* went not. 因に，R. S. V. は and he answered, 'I go, sir,' *but* did not go. となり，N. E. B. も *but* he never went が用いられている。これと同様に，Greek *καὶ* や *δὲ* が，A. V. では *but* に訳出されることがある（例えば，*Mark* iv. 32）。

勿論，verse の最初の部分に *καὶ* や *δὲ* が用いられている原文に対して，A. V. では特定の conj. では示されないが，R. V. では却って古い *And* で訳出されている場合もある。*Luke* ix では，この種の用例が6箇所（即ち，1，16，19，20，34，46）あって，その内，A. V. の1，16，46 は *Then* で始まっている。しかし，A. V. の *And* が R. V. では *But* に変ったのは同章に5箇所(即ち，11，21，47，50，62）あって，これらは何れも A. V. の familiar word とも言うべき *And* よりも，寧ろ，context からみた場合，*But* の方が適当と認められたからであろう。A. S. V. は R. V. と同数である。因に，R. S. V. では，上の11，62を除く他の3箇所は，R. V. を踏襲して *But* となっている。しかし，12，18，28は A. V., R. V. の *And* にも拘らず，*Now* が用いられている。

この様にギリシヤ語の上述の語に相当する語が，A. V. では見当らないのに，R. V. では conj. 又は *Now* (*e.g. Matt.* xxii 41) の如き adverb に訳出された例が，ほかにも随所に見かけられる点から，*καὶ*, *δὲ* に関する限り，R. V. の方が，A. V. よりも原文を重視して，忠実に訳出しようとした苦心の跡を窺い知ることが出来る。しかし，重視，忠実と言うことは，彫琢，推敲と必ずしも同義ではない。Ars est celare artem. 簡朴，直截な表現の中に，真の技巧がひそむことがある。

(イ) *cf.* 清水護『英国民の伝統と聖書』 pp. 64—71

次に挙げる *Luke* ix（1—62）で，verse の冒頭に *And* が用いられる頻度からも判る通り，R. S. V. では更に省略されて，N. E. B. では僅かに A. V. の四分の一にとどまっている。

A. V.	R. V.	R. S. V.	N. E. B.
41	43	27	10

但し，55，56節では，上の四種の聖書の間に異同がある。A. V. は，55）But he turned, and rebuked them, and said, Ye know not what manner of spirit ye are of. 56）For the Son of man is not come to destroy men's lives, but to save them. And they went to another village. となっているが，R. V. では，55～56 にかけての "and said, …… to save them." が省かれている。R. S. V. では，脚註で，この部分を補足した text が紹介されているが，N. E. B. では，R. V. と同じく省略されている。従って，R. V.，R. S. V.，N. E. B. の56節が *And* で始まることになるので，これと同一部分だけを比較すると，A. V. も *And* を56節の冒頭の語と解することも出来る。この点から，A. V. の41回は42回と数え直してもよい。

N. E. B. の立場から言えば，古い聖書で繰返し冒頭を占める *And* が，pleonastic な表現にさえ見える一面を呈するに至る場合があるが，ここで例を挙げるまでもあるまい。修辞学上，Polysyndeton として知られる A. V. の And the rain descended, and the floods came, and the winds blew, and beat upon that house; and it fell: and great was the fall of it. (*Matt.* vii. 27) も，最初は，ひとつ，ひとつの要素に対する熟慮的な反省判断を基礎とする表現であった。尚，ギリシヤ語原典では，この箇所に，*kaì* が A. V. の *and* と同じ位置で6回用いられているので，それの影響と見做すことも出来る。R. V.，A. S. V. は A. V. の *beat* が *smote* に代えられた外は，同一語句，同一 punctuation である。R. S. V. も大体，A. V. を踏襲して，*and* の使用面においては変りがない。しかし，N. E. B. では，The rain came down, the floods rose, the wind blew, and beat upon that house; down it fell with a great crash. となって，*and* は1回に制限されている。キリストは，自分の言葉を聞いても実行しない者を，砂上に家を築く人に譬え

て，その様な人の終末を説く A. V. の 'and great was the fall of it' は，各語が単音節から成り，比喩的な表現によって強い印象を聞手に与える。A. V. では，colon で切りながらも，すぐ前の *and* を繰り返し，前位置 (front-position) を占める Predicative の位置に，N. E. B. では，adv. *down* を先行させることによって強調を表わしているが，*and* は省かれて単に semicolon が続いている。

A. V. の新約では，*and* が，*Matt.* i. 3 を嚆矢として，恰も各節の opening word とさえ言える程，頻繁に用いられる点から，ギリシヤ語原典との比較において考える時，*and* を等閑に付することが出来ない様に思われる。*and* が自義的な (autosemantic) 語ではなく，拡張自由発話 (Expanded Free Utterance) に現われる Function Word であることから，一見，negligible な語に思われるが，A. V.，R. V.，R. S. V. の訳者達は neglectful な態度をとらず，原典の文体に出来る限り忠実に副う様に努めた跡がくみとられる。R. S. V. の *and.* が減少していることから，A. V. と R. V. の訳者については，特にそのことが言える。

N. E. B. では *and* が極めて限られているのは，原典の *καὶ*, *δὲ* を無視したためではあるまい。その序文に，"we have conceived our task to be that of understanding the original as precisely as we could (using all available aids), and then saying again in our own native idiom what we believed the author to be saying in his." とことわってある通り，A. V. の改訂ではなく，全く新しい英訳として，今日の平常語で表現した結果であるに過ぎない。上述の *Luke* ix, 21 で，(A. V.) *And*, (R. V.) *But*, (R. S. V.) *But* が用いられているのに，N. E. B. の訳語は *Then* であるのも，そうした基本的態度による所産であろう。

II *Behold*

A. V. の *St. Matthew* で *behold* に57回，接することが出来る。その内，(*do*…) *behold* (xviii. 10), *beheld* (xix. 26), *beholding* (xxvii. 55) が各々，1回，Declarative sentence において，*look* (*-ed*, *-ing*) の意味で用いられ，他の54回の *behold* は命令形をなしている。A. V.，R. V.，R. S. V. では，次の表からも判る通り，多少の異同があるにせよ，命令形としての *behold* が用いられているのに反して，N. E. B. では全く見当らない。A. V. の *behold* に相当する機能をN. E. B. では，他の語形で果していると考えられる場合もあれば，そうでない場合もある。ここでは，それに

関して述べてみたい。

A. V. では，命令形の *behold* に comma が続く場合と，続かない場合がある。後者の用例は4回（即ち，xi. 19, xii. 18, xii. 49, xvii. 5）あって，統語上は noun を obj. にしているので vt と解される。しかし，R. V. では，何れも comma で区切られており，単に，注意喚起の interjection と見做されよう。実際，*O. E. D.* では，verb とは別の int. なる entry で挙げてある。comma で区切られて int. と見做される場合でも，後続する noun の統語関係は，context から自然に判る。

元来，意識の根本的な modus に表象，判断，情意の三種を認めるとすれば，――言語表現と意味とは必ずしも平行しないが ―― 命令文は情意表現の一種と考えてよい。(イ) 情意作用には，その対象となる「もの」，「こと」に対する愛好，又は憎悪の念を伴なう。表象された「もの」や「こと」の存在の承認又は拒否する判断作用とは異なって，命令，願望，憧憬，感嘆等，情意に訴える文では，屢々，ある種の語を suppress して，そこに内在する関連性は自由採択として，聞手に委されることについて詳述するまでもない。

I sometimes hold it half a sin
　　To put in words the grief I feel;
　　For words, like Nature, half reveal
And half conceal the Soul within. (*In Memoriam V.* i)

と概歎して，親友の死を悼む Tennyson の "words" を「言語形式」，"Soul" を「意味」に解すれば，言語表現の特性が述べられていることになる。suppression は，話者が，伝達しようとする心的内容を言辞では与えないが，聞手の側ではそれが把握される場合を指す。(ロ)

従って，上記の4個の *behold* ＋N（＝Noun Phrase）なる命令文には，各要素間の関連性が suppress され易い傾向を含んでいると考えてもよい。R. V. では，*behold* が comma で区切られた parenthetical な表現となって，いわば遊離した

(イ) *cf.* 中島文雄『文法の原理』pp. 212—217 『英文法の体系』p. 128
(ロ) O. Jespersen : *Essentials of English Grammar* 1. 2₂ では，expression, suppression, impression について要領よく説明されている。

形をとっていても，そこには依然として何らかの統辞関係は見出される。この種の int. としての *behold* は，vi. の Imperative に由来するが，*O. E. D.* によると，1440年頃の初例がある。verb としての *behold* は900年代から見られるので，前者は比較的おくれて用いられた様である。(ハ)

A. V. のこれら4個の *behold* は，上記3種の Declar. sent. に見られる原義での *behold* から，今日の *Mind* (or *Look*) (you). と同じく，int. としての注意喚起の *behold* に至る過渡的な用法と考えられる。次に，四種の聖書 (*Matt.*) に見られる *behold* の頻度を表に挙げてみよう。

	A. V.	R. V.	R. S. V.	N. E. B.
behold: Interjection or Verb (in Imperative)	behold, 50 behold+N 4	behold, 49 lo, 5	behold, 38 lo, 5 see, 1 look, 1 here N+V 2 Here is N 1 ϕ 6	look, 5 see, 1 see now ! 1 Look at N ! 1 surely 1 see+O+Bare inf. 1 now 3 at that moment 2 all at once 1 suddenly 3 at this 1 Even as……, 1 Here is N(+Rel.) 6 What is here is…… 2 N is there Adv. Comp. 2 ∅ 23
Total (a)	54	54	54	54
behold: Verb (in other forms than the above)	do behold 1 beheld 1 beholding 1	do behold 1 looking 1 beholding 1	behold 1 looked 1 looking 1	look 1 looked 1 watching 1
Total (b)	3	3	3	3
Total (a+b)	57	57	57	57

註) ∅は *behold* に代る語が全く見当らない場合を指す。
N=Noun phrase　　Adv. Comp. =Adverbial complement
Rel. =Relatives

(ハ) *cf.* *O. E. D.* *s. v.* *Behold* *v.* 7 及び *Behold* *int.*

A. V. の *behold* を int. として用いられる以外に，もとの命令形の verb としての4回も含めて表に挙げたが，これら54回に対して，R. V. では，*behold* (int.) の外に，*lo* が新しく加ってくる。勿論，*lo* は A. V. でも屢々用いられる int. であって (*e.g.* *Matt.* iii. 16, 17 etc.)，*O. E. D.* には *Beowulf* の初例がある。R. S. V. になると，R. V. にみられる2種の int. 以外に，4種の語形が採り入れられたり，全く省略される場合がある。更に N. E. B. では，*behold* は皆無となって，15種の表現がこれに相当するか，あるいは省略されると考えてよい。寧ろ，*behold* が用いられない代り，A. V. には見当らない語形が新しく N. E. B. で用いられる場合を指すと，消極的に説明する方が穏当であろう。以下，主なるものについて，4種の聖書の用例を挙げる。但し，記述を簡潔にするため，A. V. と N. E. B. の比較を中心にして，R. V.，R. S. V. は必要な場合だけにとどめたい。

(1) A. V.: While he yet spake, *behold*, a bright cloud overshadowed them: and *behold* a voice out of the cloud, which said, …
(*Matt.* xvii. 5)

R. V.: while he was yet speaking, *behold*, a bright cloud overshadowed them: and *behold*, a voice out of the cloud, saying,

R. S. V.: He was still speaking, when *lo*, a bright cloud overshadowed them, and a voice from the cloud said, …

N. E. B.: While he was still speaking, a bright cloud *suddenly* overshadowed them, and a voice called from the cloud: …

A. V. では，2個の *behold* が int., verb 各々，異なった機能をもつ語として併置されている。R. V. では int. として用いられ，これら二つの text が何れも，conj. A～，*behold* (,) B～ となっているのに反して，R. S. V. では，A～，conj. *lo*, B～ となって，conj. の位置が変り，互に主節，従節の代替が生じている。この種の交換は，例文(16)にも見られる。N. E. B. では，前半の *behold* が省略されて *suddenly* が加っている。

(2) A. V.: and they say, *Behold* a man gluttonous, and a winebibber,

a friend of publicans and sinners (xi. 19)

R. V.: and they say, *Behold*, a gluttonous man, and a winebibber, a friend of publicans and sinners!

N. E. B.: (The Son of Man came eating and drinking,) and they say, "*Look at* at him! a glutton and a drinker, a friend of tax-gatherers and sinners!"

(1)と同じく，A. V. と R. V. の間に *behold* の用法上，差異がある。R. S. V. は R. V. と同じ構文。N. E. B. では，*Look at* を用いることによって，R. V. や R. S. V. よりも A. V. に近い。ここでは，The Son of Man を *him* で受けて，更にその補足的説明として，同格の形式をとる "a glutton…sinners" が続いている。

(3) A. V.: *Behold*, thy disciples do that which is not lawful to do……

(xii. 2)

N. E. B.: *Look*, your disciples are doing something which is forbidden…

R. V. も A. V. と同じく *Behold*, N do… であるが，R. S. V. は N. E. B. と同じく *Look* になり，Expanded form *are doing* が用いられている。E. Mod. E. では，Simple form が屢々，Expanded form の意味で用いられており，Hamlet の有名なセリフ，"Words, words, words" で答えさせる Polonius の問いは，"What *do* you *read*, my lord?" (*Ham.* Ⅱ. ii. 193) であるが，今日ならば，*are…reading* の方が普通。この種の Simple form は，Shakespeare は勿論，A. V. にも *Matt.* xxiv. 3 をはじめ屢々用いられる構文であって，聖書における Expanded form を中心とする Tense についての論及は，別の機会に譲りたい。

ここでも，上の様な E. Mod. E. の一つの用法と見做される。同時に，Expanded form は，古く，'be+on+Gerund' の外に，'be+Present participle' で叙述を生々とさせる用法にも遡ることが出来る。後者に由来する今日の用法が，焦躁，賞讃，驚き，非難等の主観的感情の纏綿した Expanded form に見出されるが，*behold* の様な，他の品詞を感情的表出として int. に転用した A. V. の語形に相当する N. E. B. の語形を考える場合，Expanded form が表わす感情的な面を忘れてはなるまい。

(4) A. V.: But what went ye out for to see? A man clothed in soft raiment? *behold*, they that wear soft clothing are in kings' houses. (xi. 8)

N. E. B.: …A man dressed in silks and satins? *Surely* you *must look* in palaces for that.

R. V. や R. S. V. は A. V. と同型であるが，N. E. B. の *Surely* は *must* と correlative をなす。序に，*must* によって命令を表わす文が，義務や必要を表わす文と同じく，情意をふまえていても，命令を客観的に表現する場合，*Look in…that.* なる命令文と峻別されるものであって，互に equivalent ではあるが identical ではない。

(5) A. V.: And, *behold*, there appeared unto them Moses and Elias talking with him. (xvii. 3)

N. E. B.: And they *saw* Moses and Elijah *appear*, conversing with him.

A. V., R. V., R. S. V. では，相関的に斜格で，modifier として表わされる「彼等」が，N. E. B. では，直格として表象され，二重判断における行為者としての期待を抱かせる位置を占めている。

(6) A. V.: And, *behold*, there came a leper. (viii. 2)

N. E. B.: And *now* a leper approached him.

元来，時を表わす *now* が，N. E. B. では，その原義が薄れて，話題転換の切掛を作り，新しく，注意すべき問題点に相手の関心を向けさせる為に用いられている。*And now* で始まる N. E. B. の例は，ほかに ix. 2, xix. 16 等がある。

(7) A. V.: And, *behold*, the veil of the temple was rent in twain from the top to the bottom. (xxvii. 51)

N. E. B.: *At that moment* the curtain of the temple was torn in two

from top to bottom.

N. E. B. の *At that moment* は，xxvi，5 にも用例がある。そのほか時間を示す adv. phrase による形は viii. 24 (*all at once*) があり，adv. 一語では例文 (1) の *suddenly* 以外に，xxviii. 2，9 等でも見られる。

(8) A. V.: Jesus… said unto the sick of the palsy; Son, be of good cheer; thy sins be forgiven thee. And, *behold*, certain of the scribes said within themselves, This man balsphemeth. …(ix. 2—3)

N. E. B.:… *At this* some of the lawyers said to themselves, 'This is blasphemous talk.'

At this は，律法学者達が秘かに「この人は神を汚している」と思った原因を示す adv. phrase であるが，(6)の *now*，(7) の *at that moment* と，意味上，極めて近く，実際，*O. E. D.* では，*at* について，*At prep.* IV Of time, order, occasion, cause, object, と同一項目で整理されているのは，この間の意味の推移を語っていると考えてよい。

(9) A. V.: Tell ye the daughter of Sion,/ *Behold*, thy king cometh unto thee. (xxi. 5)

N. E. B.: Tell the daughter of Zion, "*Here is* your king, *who* comes to you……"

や xi. 10 の如く，"Here is N, Relative～" の形もあれば，次の如く Relative clause を伴なわない文もある。A. V.: *Behold*, the bridegroom cometh. (xxv. 6) ——N. E. B.: *Here is* the bridegroom! ここで，N. E. B. の構文は，何れも，特定の場所での存在を強調する構文として表現されているが，Here is N. の代りに What is here is Adj. の構文もある。次例参照。

(10) A. V.: and, *behold*, a greater than Solomon is here. (xii. 42)

N. E. B.: and *what is here* is greater than Solomon.

A. V. では，*is* が incomplete predicator(二) として，*here* は adverbial comple-

(二) *cf.* 中島文雄『英文法の体系』 p. 137

ment として用いられており，Subject の場所規定がなされて，「人」の性質，属性は記述的にみれば，attributive な表象結合による表現が行われている。（a greater は a greater one と equivalent と考えてよい。）N. E. B. では，その様な特定の場所規定を受けている「人」の性質が，二種の判断が結合された構文では，predicative として表現され，*is* は単なる copula と解される。これと同一の構文は xii. 46 にもある。

(11) A. V.：*Behold*, he is in the desert;…… *behold*, he is in the secret chambers. (xxiv. 26)

N. E. B.："He is *there* in the wilderness",……"He is *there* in the inner room."

(9)と異なって，N. E. B. では，subject が incomplete predicator としての be 動詞に先行し，*there* は(10)の *here* と同じく，adverbial complement であるが，他に一つの adv. comp. をなす prep. phrase によって，*there* が特殊化されている。R. S. V. では，*Lo* が用いられる以外は A. V. と同種の型。

(12) A. V.：While he spake these things unto them, *behold*, there came a certain ruler. (ix. 18)

N. E. B.：*Even* as he spoke, there came a president of the synagogue,…

R. V.，R. S. V. と同じく，A. V. の "While～, behold, ～" における *while*-cl. が，N. E. B. では，"Even as～, (there～)" となっているが，emphatic particle としての *even* に，A. V. の *behold* の意義を幾分，汲みとることが出来ると考えても差し支えあるまい。

(13) A. V.：*behold*, the hour is at hand,…… (xxvi. 45)

N. E. B.：The hour has come!

A. V.，R. V.，R. S. V. の *is at hand* (＝'is closely approaching') と，N. E. B. の *has come* は，Aspect からみた場合，互に異なっており，*behold* に代る語が，後者では見当らない。ただ，表記上，exclamation mark の有無に，僅かの差異が感じられる。

(14) A. V.: *Behold*, we go up to Jerusalem. (xx. 18)

N. E. B.: We are going to Jerusalem.

N. E. B. の Expanded form は，(3)で少し触れた様に，特定の時間における動作の継続を，生き生きと表現したものであり，感情的色彩が纏綿されることがあって，A. V. の *behold* に代る表現とも言えるが，R. S. V. では，*Behold*, we *are going* to Jerusalem. となって，A. V. とN. E. B. 両者の特徴を備えている点からみると，Expanded form は必ずしも，*behold* の substitute とは考えられず，寧ろ，*behold* に代る語形が使用されない例文に算入されるべきであろう。同型は xxviii. 7 にも見られる。

(15) A. V.: Or how wilt thou say to thy brother, Let me pull out the mote out of thine eyes; and, *behold*, a beam is in thine own eye? (vii. 4)

R. S. V.: Or how can you say to your brother, …… when there is the log in your own eye?

N. E. B.: Or how can you say to your brother……, when all the time there is that plank in your own?

A. V. の *behold* に相当する注意喚起の distinctive（示差的）な語形は，N. E. B. では見当らない。R. V. には，*behold* ではなくて *lo* が用いられている。

序に，A. V. のこの *and* について考えれば，bread and butter の如き Hendiadys と同様に，二つの clause が *and* によって結合されると，従属関係が見出される場合がある。A and B の形で，両者に不分離性が意識されると，AにはBが伴なうこと，更にAが可能であるにはBが前提となること，換言すれば，BはAの十分条件 (sufficient condition) とも言うべき関係が成立するに至ることは，自然の推移である。即ち，A is if B is と equivalent である。*and* が *if* の意義で用いられるのは，*O. E. D.* によると，1205年から初例があり (*s. v. And* C. 1)，その起源は，実の所，詳らかに断定することが困難である。(ホ) *and* (or *an*) が *if* の意義で，

(ホ) *cf.* E. A. Abbott: *A Shakespearian Grammar* § 101

W. Franz: *Die Sprache Shakespeares* § 564

Shakespeare にも屢々用いられるが (*cf.* *M. ofV.* Ⅱ. v. 22, *A. Y. L.* Ⅳ. i. 51, etc.), (~) 更に聖書から一例を挙げれば A. V.: What will ye give me, *and* I will deliver him unto you? (*Matt.* xxvi. 15)--- R. S. V.: What will you give me *if* I deliver him to you? において, R. V. は A. V. と同じ *and* であるが, R. S, V, は *if* になっている。因に N. E. B. は Infinitive による *to betray him to you* が用いられている。(15)の N. E. B. における *when*-cl. は, A. V. の *and* 以下の clause に相当すると考えて差し支えあるまい。

古くは, 二つの概念の関連性が conj. によって表わされていても, 必ずしも明確ではなく, 意味関係は, 聞手の自由採択に委される場合が屢々あった。意味の明晰化を特色の一つとする現代英語の傾向と相俟って, 上の *and* を更に明確にするために, *if* を付け加えた形が14世紀末から見られる (*cf.* *O. E. D.* *s. v.* *And* C b)。A. V. から一例を挙げると, But *and if* that servant say……(*Luke* xii. 45)
(*c. f.* R. V.: But *if* that servant shall say……; R. S. V.: But *if* that servant says……; N. E. B. は R. S. V. と同一型)

(16) A. V.: Now when they were going, *behold*, some of the watch came into the city, and shewed unto the chief priests all the things that were done. (xxviii. 11)

N. E. B.: The women had started on their way when some of the guard went into the city and reported to the chief priests everything that had happened.

A. V.—R. V.—R. S. V. は構文上, Periodic sentence 即ち, Conj. S_1+P_1, behold, S_2+P_2であって, *behold* は主節の内容に対する注意喚起の語であるが, N. E. B. は Loose sent. の構文をとりながら, 普通にみられる Conj. A~, B~ → B~, conj. A~ の様な主節, 従節の構成要素は変らないが, 主節が, 後位置 (post-position) から前位置 (front-position) へ移るといった種類ではなくて, S_1+P_1 conj. S_2+P_2 の構文をとる N. E. B. では, 二つの節の文法的関係に変化が生じている。換言すれば, clause に先行する conj. の位置にズレが生じてい

(~) 筆者による「現代英語における Subjunctive Mood (Ⅴ)」「北九州大学外国語学部紀要11号, 1965) で詳述した。

る。

この文を context からみた場合，「女達が出かけたこと」（＝A）よりも寧ろ，「番人が都に帰って，キリスト復活に関する一切の出来事を祭司達に話したこと」（＝B）に重点が置かれている。A. V. では，聞手（読者）の注意を，最後の命題（＝B）まで引きつけておくに相応しい Periodic sent. が用いられている。一般的に，Periodic sent. の方が formal な感じがするが，(ト) Loose sent. は談話的で物語やくだけた記述文に相応しい。N. E. B. は後者を用いている。しかし，内容的には肝心な点（＝B）を強調するため，主節では "The women had started on their way" だけの簡潔な描写に留めているので，却って，読者の関心は後続する clause に向けられている。若し，A. V. で，Bを示す "some of the watch …… that were done" なる主節を，前位置に移して，"when they were going" を後位置に変えた構文を仮に作って，"B～conj. A～" で示すと，N. E. B. で実際用いられた "A～conj. B～" の文体を比較すると，各々の効果は明瞭である。Loose sent. を N. E. B. は用いながらも，従節の部分が判るまでは，読者の気持は suspense の状態に置かれたままである。*behold* に代る語が N. E. B. では用いられていないが，文体上の効果においては，実際，A. V. と変る処がない。

N. E. B. で，比較的単純な動作，状態を記述する "(be) on one's way" の如き語句が主節に用いられ，従節が表わす内容に，より多くの関心が向けられる場合，A. V. と N. E. B. の clause の間に，conj. の位置がこの種のズレを生じる文は，外にも見られ，例えば，*Matt.* ix. 32 についても全く同じ点から説明される。

(17) A. V.: And when they were departed, *behold*, the angel of the Lord *appeareth* to Joseph in a dream, saying, Arise, …… (ii, 13)

R. S. V.: Now when they had departed, *behold*, an angel of the Lord *appeared* to Joseph in a dream and said, "Rise, ……

N. E. B.: After they had gone, an angel of the Lord *appeared* to Joseph in a dream, and said to him, 'Rise up, ……

A. V. や R. V. (A. S. V.) では，*behold* に続く主節で，所謂 Dramatic present

(ト) *cf.* P. G. Perrin : *An Index to English* pp. 550—551

appeareth が用いられているが，これらと同じ構文による R. S. V. では Preterite *appeared* が用いられている。N. E. B. では *behold* が省かれているが，*appeared* である点において，時制上，R. S. V. と共通する。この様に，A. V. において，*behold* による注意喚起をうける clause 内で，Dramatic present をとる文は，ほかに，*Matt.* ii. 19 がある。そこでも，verb は同じく *appeareth* であり，しかも，"in a dream" なる Modifier を伴なう。R. S. V. は *appeared* に変り，N. E. B. は *behold* が省かれて Preterite が用いられている。A. V. や，R. V. で *behold* があっても，Dramatic present が不可欠の時制ではないことについて詳述する必要はあるまい。

これまで，A. V. から N. E. B. に至るまでの聖書における *behold* をみてきたが，既に挙げた表や諸例からも判る通り，A. V.—R. V.—R. S. V. に至る過程の中で，*behold* 使用頻度は漸次減少して，それに代る形が新しく生じてきたと考えてよい。N. E. B. から，verb としての *behold* は無論のこと，int. としての *behold* も姿を消しているが，それがために不便が感じられることもない。寧ろ，不便が感じられないので姿を見せなくてすむ，と考えることも成り立つ。注意喚起の語を余り繰り返すことは，却って，冗漫に陥り易い傾向さえある。今日の英米の作品で *behold* の占める frequency を併せ考えると，聖書だけが例外ではない。A. V. 中，散見する *behold* に，今日からみれば archaic な文体の特徴を垣間見ることが出来るとすれば，同じ理由で，*behold* 皆無の N. E. B. には，（その序文で記されてる表現を借りると，）"the idiom of contemporary English" で点綴された平明な文体の一端を認めることが出来よう。